原告団

遺族・CO裁判、災害責任追求、特集号

第三十七号

遺族・諸藤梅男さん（六十三才）の住まいは福岡県山門郡三橋町上久末百六十七番地。大爆発で長男重直さん（行年十九歳。三井建設組夫・仕繰工）をうしない、それがもとで妻の秋乃さんにまでも先立たれてしまった。家は農業（稲作とイ草栽培）。家督を相続して働く次男伸一さん（二十五歳）その嫁の多美子さん（二十二歳）、孫の理香ちゃん（生後一年半）といっしょの暮らし。この片田舎の家にまで、あの大災害の爪跡が刻みつけられているのが不思議にさえ思われたが……。おとずれたとき、イ草の苗ぞろえに余念がなかったものの、手を休めて諸藤さんが語ったことは？

稲とイ草と

まあ、今の作は稲作が九反歩にその裏作のイ草栽培が六反。あとが、休耕田たんも。イ草も、今年からは四反歩に減らしたが、需用の関係で、耕作を抑制されたからの。

稲作は減らせ。ミカンも値下がりで摘果しろ。イ草までがこれでは、百姓はやりきれんばんも。

ところがあんた、生産費の方は逆に、二倍も三倍も値上がり。

今は、稲作はみんな機械機械での、ブルドーザーは買うた。田植え機も買うた。トラクター（耕転機）も買うた。こんどはそれに、収獲用のコンバインまで買うたばんも。

見なはれ、家のなかの土間も、小屋のなかも農作業用の機械ばかり。みんな、やれ農業近代化資金、やれ何何資金というわけで、農協からの借金たんも。結局は、毎年毎年返していかんならでけん金。

肥料も、バカにならんばんも。おもに尿素化成を使うとるが、イ草栽培用だけでも二十五俵から要るからの。この肥料代が、去年からすると二倍にはね上がった。

イ草栽培には、製品化するためのビニールがつきもの。この値が、去年からすれば約三倍。たまったもんかん。

忘れるにも

経費は、まだほかにも要るばんも。田植え、イ草植えつけ、すべて人手が要る。一人一日の手間賃四千円。その人手を、今年もイ草植えに三十七人から雇うことに、もう相談ができたがの。

イ草の苗は、冷たい泥田に、三本づつばかり分けて植えこむが、深植えすると分ケツできず、それかといって、浅過ぎても横にばかり広がって使いものにならず。これば、仕方がなかなか。増改築もせにゃならんでつなってくる。

曲り家ンごたるこの家も、百年以上はたっとろうが、今年ちょっと手を入れただけで、ホーラ、こにある請求書の通り二十八万円ばかりもかかった。

だからくさん、今うちじゃ米を九十俵からとるが、たとえ九十俵とっても、今生産者価格が俵で一万三千円。計算して見なはれ。イ草栽培による粗収入を加えても、百五十万円前後。家計簿にどんつけてゆくなら、絶対に黒字は出てこんじゃん。

ときどきはいってくる現金に助

イ草の植えつけ準備で、日も足りぬように働いている諸藤さん。どこからか、よちよち歩いてきた孫の理香ちやんが、膝のうえにちよこん。幼な心にも、ひとり遊びはきつとさびしいのだろう。

夏は稲作冬にはイ草

働くことで忘れている二重の苦痛

だが、裁判には勝たんなら

遺族・諸藤さんの

その後

けられとるだけで、ほんとの話がめしを先に食いのばしよるところたんも。

年じゅういっしょうけんめい働きながら、よか米は供出してしまい、わが口にはいるかんじんの米はといえば、屑米ばかり。

それでも、爆発で殺された長男の重直にかわって、次男の伸一が家督を継いでがんばってくれよるから、やがてきっとよか日もくるくさんも。

〈諸藤さんの膝に、ベソをかきながらはい上がってくる孫の理香ちゃんを抱きあげ、つづいて〉今年満六十三歳を越えたわしも、こんか可愛いい孫の守りもできん。息子たちと同じように、毎日畑に出て働きよるたんも。なあに、百姓仕事もまだまだ一人前のことはできるからの。それに、働きよる間なっとん、殺された息子ンことや、先立たれたばあさんのことが忘れられるからの。

二重の不幸

思い出したくもなかが、爆発で死んだとき、息子は十九じゃったが。わしが五十二で、ばあさんが五十三。息子は、それこそ柳川商業を卒業したばかり。

卒業するとすぐ、息子は大牟田に働きに出かけはじめたが、単車で西鉄柳川駅まで飛ばし、そこから大牟田までは急行電車。

息子が、三井建設の組夫として三川鉱で働きよることを、わしとばあさんが知ったのは、入社後二カ月もたってから。まさか、炭鉱で、しかも三交代までして働きよるなどとは思いもよらんことじゃったが。将来は、百姓ばかりではたっていかん。また機械化農業になってゆくから、働きながらでも十分やってゆける——。これが息子の気持じゃったとたんも。

その日、息子は二番方で午後から出かけていったが、出かけるその足まで、いっしょうけんめいに畑仕事もやってくさん。単車にうち乗って飛び出していった姿が、今も目の底に焼きついているがの。

それが死んで帰ってきたじゃなっかん。それこそ眠っているような死に顔じゃったが、それがもとで、ばあさんはとうとうノイローゼになってしまう。それからというものは、朝といわず夜といわずうたをうたうのが仕事。好きなうたは、だれかがうとうた〝水戸黄門〟じゃったが、はた目にはさぞのんきなことに映ったろうの。でも、内心では悲しさでたまらんじゃったに違いなかばんも。その証拠にばあさんは、死んだ息子と同じとし頃の、近所の息子のところに、何べんお嫁さんがこらしても「見ゅうごつでんなか」といっていっぺんでも腰を上げたことがなかったからの。

夜も眠れず

今さらどげん「帰ってきてくれ」と願うて見たところが、死んでしもうた息子の命の帰ってくるはずはなし。せめて許されることならば、栗木幹元社長ら三井鉱山の幹部どもを、息子の命を奪ったあの三川鉱の坑底に閉じこめて爆発させ、そして、いっぺんでよかけん、奴らの家族たちが泣き叫ぶところを見せてもらいさえすれば

わしはもう裁判するこつも要らんと思いよる。はじめから、わしは金のために裁判をうったつじゃなかけんの。

息子さえ三井から殺されなかったら、ばあさんまでがあげん悲惨な姿で死んではってくこともなかったことを考え始めると、もうおしまい。夜も眠れんとたんも。

それにいかにあの時分のこととはいえ、息子の命とひっかえにもろうた金といえば、会社からの弔慰金の四十万円だけ。三井建設の組夫。しかもその年に入社したばかりでは、一文の退職金もなし。

あの仏壇（と、奥の間の立派な仏壇を指さして）が、その四十万円に、十万円足して買うたたんも。四十九日の命日前のこつじゃったばんも。だまっておれるはずは、なかろうもん。

法廷で、わしらの弁護士の諸先生がいっしょうけんめいに、三井の災害責任を追及しなはるのを、ニタリニタリ笑いながら平然とかまえている、あの会社側の弁護士連中の態度も頭にくる。

とにかく、わしの息のあるうちに、この裁判に勝って是が非でも会社幹部に頭を下げさせんなら、わしは死ぬにも死にきれん。先にいってしもうとる息子とばあさんに対しても、顔向けがでけんじゃなっかん。石にかじりついても、この裁判には勝たんなら……。

付記

私たちが、いざ帰ろうと腰をあげると、再びイ草の苗ぞろえの仕事にかかるのだった諸藤梅男さん。その日その日の日課は、絶対に変わることなく、午前五時半の起床とともに始まる。

朝が早く明ける夏など、さっそく庭に降りたっては草をとったり……。寒くなってきた今は、まだ同家に昔のまま残っているカマドの前に腰をかがめ、暖をとりながらの茶わかし。

イ草の植えつけに猫の手も借りたい今は、茶をわかすかたわらイ草の苗をそろえることもある。

そのうち、この家の若夫婦が起き出てくる。お嫁さんの多美子さんは、いそいそと炊飯の仕事。朝食は、ほぼ七時頃にきまっている。

やがて、西日本テレビの子ども番組〝ピンポンパン〟が始まる。一寸の虫にも五分の魂のたとえの通り、その時刻になると必ず、生後一年半という幼い孫の理香ちゃんが目をさまし、寝床からはい出してくる。おじいちゃんの膝の上に抱かれながら〝ピンポンパン〟の筋を、目ばたきもせずに追う理香ちゃん。彼女の現在の生活の、大きな部分を占めているのでもあろう。

その番組がすむと、いよいよそがしい仕事が待っている田ンぼへ。昼食こそ家に帰ってしたためるものの、すめばまた田ンぼへ出てゆき、今は、寒風吹きはらい、冷い水をたくわえた泥田に降り立ってはイ草の植えつけ。

イ草の刈り入れは初夏だが、ひきつづきあの炎天下の稲作りの仕事にかからなければならない。

夕——、田ンぼからの帰りはほとんどあたりが暗くなってから。

食事—入浴、と終えたあと、毎晩必ず仏壇の前に坐っては、三井の手で命を奪われた長男の重直さんと、そのため悲惨な生涯を閉じていった亡妻秋乃さんの冥福を祈るのが常である。

その諸藤さんの隣りにちょこんと坐り、もみじのような手を合わせては「ア、ア」と頭をさげる可愛いい理香ちゃんの姿があるが、こうして、諸藤さんの一日一日の日課は夜のなかへ吸いこまれてゆく。やっぱり彼も三池の遺族の一人。その生きざまは、同じようにきびしい。

×　×